+YUUSHA NO SONOGO+
勇者のその後
3
地球に帰れなくなったので
自分の為に
異世界を住み良くしました
JUUICHIYA SUI
十一屋翠

主な登場人物
サリア
古の王女様。現代では失われた魔法を操る。
ミユーラ
勇者パーティのメンバーその2。
おっぱいの大きな神官。お姉さん的存在。
エアリア
勇者パーティのメンバーその1。
ハーフエルフの魔法使い。可愛いが胸は小さめ。
トウヤ
地球から勇者として召喚された本作の主人公。
とある事情で地球に帰れなくなったので
異世界復興に励む。
クロワ
帝国の皇帝。国を救うため、勇者に接触する。
シルファリア
魔王の娘。勇者の子種を狙っている。
ウォーターゴーレム
現代地球の知識と異世界の魔法によって
生み出された、謎のゴーレム。

プロローグ　グッバイ人間の国

異世界から帰れなくなってこの世界の復興をしていた俺、トウヤ・ムラクモは、魔王の娘を名乗る美女シルファリアに戦いを挑まれたものの、見事彼女に勝利して愛人とする事に成功した。

いや、事実を簡潔に説明するとそうなるんだよ。

問題はここからだ。

何やかんやあって俺の仲間達にも受け入れられたシルファリアを連れて、俺はハジメデ王国の王様にその事を報告しに行った。何せシルファリアは魔王の娘なので、ちゃんと説明しないと痛くもない腹を探られる可能性があったからだ。

しかしその席でシルファリアから、魔族を大人しくさせる為に魔王にならないかという驚きの提案をされた。

更には、何故か王様達も魔王になるのを勧めてくる。そんな訳で俺は、仲間達と相談して、前向きに検討する事にした。いや、魔王になれば地球に帰れるらしいからさ。

だが、ソレは罠だった。

ハジメデ王国の王様を始めとした西側諸国の王族達は、俺を魔王にする事で俺から勇者の力を失

わせようと画策していたのだ。それだけではなく、俺の持つ異世界の知識を手に入れる為に、俺を元の世界に戻す逆召喚術式の研究を中止さえしていた。

ラザリア盗賊団のおかげでその事実を知った俺は、西側諸国の人間達と手を切って独自に行動する事を決意し、様々な人達の協力を得て秘密の開拓村を作るのに成功。

そして、魔王就任の式典にて、俺は人間達と袂を分かったのだった。

第一話　新しい活動

「さて、これからの行動だが」

俺は、北方の極寒の地イナカイマに建てた屋敷のリビングで、エアリアを始め俺に付いてきてくれた女達に語りかける。

旅の始まりから一緒にいたバルザックがここにいないのは残念だが、騎士であるアイツには守る者がいるからな。

気を取り直して、俺は今後の方針を皆に告げる。

「まず、イナカイマを始めとした開拓村の発展に力を注ぎたいと思う」

俺の言葉に皆が頷く。

「そうね。国と袂を分かったのだから、自分達の環境を整える事に集中するべきだわ」

エアリアが開発計画に同意してくれる。

「私としても移住してきた方達の心の平穏の為、村の広場にてミサを行いたいと思います」

神官のミューラは、移民達の精神面のケアをしたいらしい。

「生存環境の確保は私達にお任せください。一緒にイナカイマに来てくださった教授達と協力して、

より広範囲に安全な環境を作ってみせます！」
　自分の故郷である北方の地の再開発とあって、元王女のサリアはひと際やる気満々だ。
「んー、今のところ私は特にする事もないな。とりあえず侵入してきた危険な魔物でも狩るとするか」
　生産系の技術のないシルファリアは、ちょっと気だるげに魔物退治を提案してきた。
「助かるよ。イナカイマには元軍人や冒険者はいるが、それだけだと戦力が不安だったんだ」
　俺達はそれぞれ一騎当千の戦力を持つが、いつも全員がイナカイマにいられる訳じゃないし、何より皆忙しい。
　この北方の土地は厳しい環境なだけあって、魔物や獣の数は少ない。だがその代わりに、かなり危険度の高い魔物が出現する時がある。
　だからこそ、シルファリアが常に戦ってくれるのは非常に都合が良かった。
「こういった土地では、強力な魔物がいても人間達に狩られる事がないからな」
「そうなのか？」
「ああ、人間が問題なく生活できる温暖な環境なら、自分達の生活圏を広げる為にも危険な魔物は真っ先に排除対象となるだろう。だが、極寒の地では人間が生活できる場所は限られてくる。当然討伐の為に使う労力も違ってくるさ」
　なるほど、生活圏を広げられない環境では、魔物を狩る危険を冒す必要もないって訳か。この環境だ、下手をすると魔物と戦う前に吹雪と寒さで全滅してしまうかもしれないものな。
「だが、いずれ村が発展してきたら、別の意味で私が必要になるだろう」
　と、シルファリアは意味ありげに笑う。
「どういう意味だ？」
「そのままの意味だ」
　そう言ってシルファリアは、テーブルの上のカップを真ん中に寄せていった。
「村が発展すれば町になり、町が発展すれば都市になる」
　そしてリボンを取り出して、集めたカップの周囲をぐるりと囲むように置く。
「都市が更に発展すれば、それは国へと姿を変える」
　シルファリアは紐の端を引っ張って、蛇が回るようにグルグルとカップの周りを回転させる。
「しかし、国という輪郭が不確かでは、それぞれの都市は好き勝手に行動を始める」
　そう言って、今度はカップをリボンの枠の外側に置いていく。
「つまりシルファリアは、このイナカイマの規模が大きくなったら、王族として政治に参加するって訳ね？」
　エアリアの答えに、シルファリアが満足そうに頷いた。
「そうだ。この中で政治に詳しい者は少ないだろう？　だとすれば、私が力を発揮する舞台はそこ以外にあるまいよ」

自信満々に答えるシルファリア。
ふむ、確かに政治を専門的に担当する者は欲しいところか。
とはいえ、文化形態のよく分からない魔族であるシルファリアだけに政治を頼むのは、ちょっと心配だ。魔族のルールで物事を進められたら、トラブル待ったなしだろうからな。
これには一応口出しをするべきだろう。
「それなんだが、政治に関してはサリアにも関わってもらおうと思っている」
「私もですか？」
サリアがキョトンとした顔で俺を見る。
「そうだ。元々サリアはこの北方で栄えていた国トゥカイマの姫だ。だとすれば、この極寒の地での政（まつりごと）はサリアの方が詳しいだろう」
「……」
目を丸くして俺を見つめてくるサリア。
国を失った自分に、そんな機会が与えられるとは思っていなかったのだろう。
「やれるか？」
俺が意思を問うと、サリアは勢いよく首を縦に振った。
「任せてください！　このイナカイマをトゥカイマ以上の国にしてみせます！」
やる気満々とばかりにサリアは強く宣言する。

うんうん、そう言ってくれると俺も嬉しい。
サリアは国を失って天涯孤独（てんがいこどく）の身だ。
だが、このイナカイマが失った故郷の代わりとなれば、彼女の孤独感も少しは減る事だろう。
「私、頑張ります!!」
「ああ、任せた」
燃え上がるサリアを横目に、エアリアが俺の脇を小突（こづ）いてくる。
「てっきりあんたが王様になるかと思ったんだけど？」
んー、エアリアの言いたい事は分かる。というか多分、イナカイマが発展したら、新たにやって来る移民達は俺を王様だと思うだろう。
だが、それではいけない。
俺が王様になってしまったら、勇者の力を失ってしまうかもしれないのだ。
別の職業に就いた勇者は、その力を失う可能性がある。
そうバルザックが言っていたのだ。
だったら俺が王になってしまわないよう、誰か別の人間を指導者の役目に就ける必要がある。
そういう意味でも、トゥカイマの王女であったサリアを新たな国の女王にする事は都合が良いのだ。
って訳で、任せたぞサリア。

「つまり、私は信用できないという事か」
と、後ろからじっとりとした視線が突き刺さる。
振り返るまでもない。シルファリアの声だ。
「いや、そういう訳では……」
振り返るのが怖いです。
「良いのだ。私はどうせ魔王の娘、しかもお前の魔王就任式典に他の魔族を連れてこられなかった……その程度の私の政治手腕など、信用に値しないのは当然だ」
そういえば、結局魔族は来なかったな。
「どうせ私は、武力しか能がない。それなのにお前にあっさり負けて、裸に剥かれて愛人にされた女だよ」
事実だけにフォローしようがない!!
「所詮私は、ちょっと珍しい魔族の愛人枠でしかないのだろう？」
「いや、そんな事はないぞ」
観念して俺が振り向くと、シルファリアはソファーの上でグンニャリとだらけながら口を尖らせて拗ねていた。猫みたいだなぁ。
「ふーん、どうせ私は淑やかさの欠片もない武力バカだとも」
まるで子供のようにゴロゴロと転がりながら駄々をこねるシルファリア。

コイツ意外と子供っぽいな。
「父上も、私に戦いはまだ早いと言って戦闘に加わらせてくれなかったしー、良いのだ良いのだー。私なんて何の役にも立たない駄目王女なのだろうー？」
あかん、完全に拗ね拗ねモードだ。でも、他の皆にはない反応なのでちょっと可愛い。
とはいえ、これどうやって機嫌を直してもらえばいいんだ？
ちらりと周囲を見回すと、既に部屋の中には誰もいなかった。
「全員逃げやがった……」
さもこれから面倒くさくなるぞと言わんばかりの逃げ足の速さである。お前等、後で覚えておけよ？
「ぷんぷーん」
「……はぁ」
あからさまに拗ねているのを主張するシルファリアに対し、俺は懸命にご機嫌を取るのであった。
ああ、記念すべきスタートがこんなグダグダで良いのだろうか？

◇

『勇者は聖女を誘拐して、邪悪な儀式を行おうとしてるんだってー』

『こっちだと、勇者は貴族に騙された怒りで魔族の仲間になったって噂になってるよー』
『アタイの方は、貴族が勇者を暗殺しようとして返り討ちにあったって話になってるね』
魔王継承の式典を拒絶してから数日、俺は忍者娘達に各国の町や村での俺の噂を調べてもらい、その報告を通信魔法で受けていた。
今回の件で俺が人間達と袂を分かった事が、世界にどう伝わっているかを調査する為だ。
イナカイマの開拓も重要だが、外界が今どうなっているのかという情報もまた重要だからな。
『その式典だっけ？　それの二日後に、ハジメデ王国の王都から馬で一週間かかる町まで情報が届いてたよー』
『多分、転移魔法か通信魔法で急いで噂を流してるのね』
『なんでそんな事するのさ？』
『私達も昔やられたでしょう？　勇者が貴族達に騙されてどことも分からない場所に捨てられそうになった時、その事実がバレるとまずいから、ウソの噂を権力者が流したじゃない。そうして後から流れてくる本当の事実を揉み消したのよ』
『なるほどねー』
と通信で会話する忍者娘達。彼女達は、俺が鍛える前はラザリア率いる盗賊団の一員であり、更にその前の素性は商人や裕福な家の娘だった。
彼女達の中には、ライバルの悪徳商人から悪質な噂を流され、店を潰された子も結構な数いるらしい。だから、今回貴族達の行った策略の真意を見抜くのも早かった。
『あとねー、イナカイマに移ってきた人の事を伝えたら、行きたいって言う人達もいたよー。魔族との戦争のどさくさで追い出された集落の人達みたい』
「そうなのか？」
『うん、なんで追い出されたかっていうとね。その人達の集落は、昔から現地の住民と移民の仲が悪かったんだって。そんで魔物の襲撃で昔からいた人達の数が減って、移民の子孫に追い出されたって言ってた』
酷い話もあったもんだ。まぁ地球でも、現地人と移民との間のトラブルは昔からあったからなぁ。
「分かった、イナカイマに移住を望む人達を集めておいてくれ」
俺は忍者娘の一人に指示を出しておいた。
『あー、それがねー。その話をしてたら役人が凄い勢いで私を捕まえに来たから、慌てて逃げだしたんだよー』
『あ、あたしもそんな感じー』
『アタイもだね。もう役人や密告者が目を光らせてるよ。既にアタイ達の情報が役人のところに行ってるっぽいね』
ふむ、それは面倒だな。
「分かった。一旦全員を回収するから。いつもの森まで来てくれ」

俺は、今自分が隠れている森へひとまず来るように、忍者娘達へ指示を出した。
『はーい』
『了解です！』
『あいよ！』

◇

忍者娘達を回収した俺は、彼女達を連れてイナカイマの村まで帰ってきた。
「んじゃ、アタイ達は自分の村に戻るよ」
「おつかれー」
「おつかれさまー」
一仕事終えた忍者娘達が、転移ゲートのある方角へと歩いていく。
実は彼女達にも、北方のこの地でも住めるように村を用意しておいたのだ。
その名もシノビ村。
俺考案の忍者育成村である。
万人に教えるのには向かない、悪用も可能な知識や技術、生活魔法を教えて、村の外で活躍してもらう、そんなスパイ育成村と考えてもらえばいい。

シノビ村の住人には、それぞれに適性のある技術を学んでもらい、その中でも幅広い分野で技術を修めた者にはシノビの称号を与えて、村の外に派遣する予定だ。
目的は情報収集と移民集め、あと最悪の場合は戦力になってもらう事も考慮（こうりょ）している。
シノビ村の住人は信用の問題で、まだラザリア達忍者娘だけに制限している。
他の移民達の中に、他国のスパイがいないとも限らないからだ。理想としては、そうした心配のない小さな子供から忍者を育てたいと思っている。
……思っているのだが、倫理的にどうよ、と思わんでもないんだよな。
だって、それをやったら少年兵を育てるようなもんで、あまりというかかなり人道に反する。
まぁ今はまだ忍者娘達だけで頑張ってもらって、次第に外部の人間も修業させる事にしよう。
修業させるにも小さい頃からの方が良いので、やはり子供のうちからの方がいいなーと思ってしまうんだけどね。
ともあれ、ほとぼりが冷めるまではエアリア達に告げた方針の通り、イナカイマの開拓や、ケモ少女達が住むミナミッカ群島の開拓に精を出すべきだろう。
ああそうだ、今度バラサの町の領主レイリィのところにも顔を出すかなー。

◇

「ただいまー」
俺は、イナカイマ村の中で一番大きい家である、自分の屋敷に帰ってきた。更に言えば、この家は村長の屋敷でもある。村長はサリアだが、彼女が俺と一緒に住むのを望んだので村長の屋敷も兼ねる事にしたのだ。
という事もあって、ここにはちょくちょくお客さんがやって来る。
「おお、トウヤさん！　待っていましたよ！」
と、先に屋敷にいて俺を迎えたのは、村の防衛を任せている自警団の団長、ジーサさんだ。
「こんにちはジーサさん。何かありましたか？」
「ええ、我々では荷が重い魔物が出現しました。今は部下が囮になって村から引き離そうとしていますが、このままだと村に侵入されてしまいます。申し訳ありませんが、退治していただけませんか？」
「シルファリアは？」
たしかシルファリアが、自警団の手伝いという名目の暇つぶしをしていた筈なのだが。
「シルファリアさんは、同時に現れた別の魔物を相手しています」
なるほど、それで俺にお鉢が回ってきた訳か。いつもならシルファリアだけで軽く終わらせる事ができるからな。
こうした時の為に、やはり複数の実力者を育てておく必要がありそうだ。

「ジーサさんで駄目となると、結構な大物ですね。分かりました」
このジーサさん、元々とある騎士団の部隊長だったが、年齢を理由に部下である副長に後を譲った人だった。
表向きには年齢の為とされていたこの隊長交代劇の真相は、野心的な副長の不穏な動きに気付いたジーサさんが、家族に累が及ぶ前に引退したという事らしい。
それで終われば良かった。しかし、運が悪い事にジーサさんには人望があった。
人望があった事が災いし、引退した後でもジーサさんに相談に来る人間が多く、それが副長の誤解を招く事になった。自分を新隊長の座から引きずり下ろす為の企みが進んでいると勘違いした副長は、更にジーサさんを追い詰めようとしたのである。
ジーサさんは元部下の密告でそれを知ったものの、命を狙われている証拠がない以上国には頼れない。こうなってはもうこの国にはいられない、そう考えて奥さんを連れて逃げる事を決意したが、自分はともかく、老齢の奥さんに旅をさせるのはさすがにためらわれた。そんな時、以前部下から聞いた謎の開拓村への勧誘話の噂を思い出し――一か八かこのイナカイマに移住してきたという訳だった。
その噂が実は悪質な人攫いである疑いもあっただろうにと驚いた俺に、ジーサさんはこう言った。
「仮に騙されたとしても、ジジィとババァでは奴隷にしても金になりませんからな」
なんとも豪儀な話である。

結果、俺は騎士団を率いた経験があるジーサさんをイナカイマに招き入れ、魔物と戦う自警団の教官として働いてもらう事にした。

今回の件で、西側諸国は目に見えない部分での腐敗が深く、まだまだ問題は多い事が分かった。それと同時に、ジーサさんのように不遇な立場にある有能な人材が大勢いるのではないかとも気付かせてくれた。

とはいえ、そうした人材を確保しにいくのは今後の話であって、今は目の前の問題に集中しないとな。

「それで、魔物の姿や能力は？」

「大型の熊に似た魔物です。大きさは七メートルほどで、とにかく毛皮が硬くてこちらの槍が通りません。魔法も水、氷系の魔法はほぼ無効化されます。炎系の魔法は多少通じますが、倒しきれるだけの威力がありません」

ジーサさんが的確にこれまでの戦いで得た情報を伝えてくれる。

「それに、巨体の割に足が速く、雪の上でも足を取られる事なく素早く動きます」

「そりゃあ羨ましい。そいつの素材を回収して、吹雪の中でも活動できる装備が作れると良いですねぇ」

などと呑気な事を言いながら、俺は村の出口へと向かった。

そこでは、ジーサさんの部下が馬と共に待機しており、ミューラが負傷した彼の部下を回復魔法で治療していた。

さすがミューラ、負傷者が出たと聞いて即座に現場に急行してくれたらしい。

他にもドクター達が軽傷の者の治療を行っていた。

「ミューラ、怪我の具合は？」

見た感じでは重傷者はいないな。おそらく負傷度合の悪い者は先に治療したのだろう。

ミューラから治療した人間の傷の深さを聞いたのは、件の魔物の情報を得ようとした為でもある。負傷度合から、力が強い、爪が鋭いなど分かる事はいろいろあるからだ。更に言えば、この世界は剣と魔法の世界、魔物が魔法を使ってくる可能性だってある。そうした情報を皆で共有する事は、イナカイマの治安を維持する為に必要なのだ。

「重傷者が何人かいたものの、回復魔法によって危険は脱しました。毒などの特殊な症状こそありませんでしたが、爪で抉られた傷が深いですね。場所によっては骨にまで達しています。あっ、トウヤさんに教わった通り、ちゃんと傷口を浄化魔法で消毒してから治療をしています」

よしよし、現代医学の知識を参考にした治療手順も順調に浸透しているみたいだな。

ともかく今回の魔物は、特殊能力はないが、毛皮が凄く硬くて、割と動きが速いという事か。単純に肉体的な能力が高いタイプみたいだ。

というか、こういうタイプって変に搦め手で攻めるのが上手い敵よりも危険なんだよなぁ。

「それで聖女殿、治療を終えた者達はどれくらい休ませる必要がありますか？」

と、ミューラに尋ねてきたのはジーサさん。
回復魔法で治してるんだからすぐに戦えるようになるんじゃないのか？　と思うかもしれないが、そんな事はない。そもそもこの世界はゲームの世界ではないので、ステータスを見てＨＰが全快したかなんて分からないし、失った体力は休まないと回復しない。
それに、先ほどのミューラの言葉通り、これまでは治療の際に傷口の消毒をする事は稀だった。あからさまに汚れていれば浄化魔法で傷口を綺麗にする事もあったにせよ、見た目で分からなければそのまま回復魔法で傷口を塞いでいたみたいだ。
そう考えると、治療が完了したと思われた人間の多くが、破傷風など何らかの病気を発症させて亡くなっていてもおかしくない。
そんな事が起こらないように一人ひとり完治するまで治療すればいいと思うかもしれないが、それはそれで問題がある。
魔力の残量だ。
回復魔法を使えば当然魔力が減る。一方、神官達の魔力にも限度がある。
だからこの世界の回復魔法使いは、ある程度傷が治って危険な状態を脱したらそれで治療を終え、後は自然治癒による回復を待つ。ただ、戦争などで兵をすぐに戦線に戻さないといけない場合は、例外的に大量に魔力を消費して戦えるところまで傷を治すのだそうだ。
こうした事情の為、指揮官であるジーサさんは、自分の部下がどれくらいの間、村の護衛任務に

就けないかを知っておく必要があった。
「そうですね、重傷だった方でも明日には動けるようになります」
「たった一晩で⁉　おお……さすが聖女様の回復魔法は凄まじいですな」
相当深い傷だったのだろう。それが明日には動けるようになると聞いて、ジーサさんが目を丸くする。
そうなんだよな。最近はあまり強敵に出会ってなかったから忘れがちだけど、ミューラの回復魔法に助けられた事は一度や二度ではない。
彼女は教会の秘蔵っ子だけあって、回復魔法の能力が非常に高く、また魔力も普通の神官に比べて多い。
更に言うと、俺達と一緒に魔王討伐の旅をしていたおかげで、どれくらい回復させれば再び戦えるようになるかの見極めも上手くなっていた。
ホント、ミューラが回復役として同行してくれて助かったよ。
たとえ教会に打算があったとしても、彼らが勇者の仲間としてミューラを育ててくれた事には感謝しないといけない。ついでに、ミューラが自分の意志で腐敗した教会から俺の元に来ると決めたくらい、純粋無垢にしてくれた事にも感謝しておこう。
「傷の心配もないみたいですし、俺達は魔物退治に向かいますか」

◇

「前に出すぎるな！　負傷者は後退して傷の手当てを受けろ！」
ジーサさんの案内を受けて町の外に出ると、魔物と戦っている自警団の若者達が叫んでいた。
熊の魔物は大きく、周囲を自警団の団員達に囲まれているというのに、その姿がはっきりと見えるくらいだ。
その光景は二階建ての家が動き回っているかのようで、村人はもちろん冒険者や騎士上がりの自警団員ですら攻めあぐねている状況だった。
「うわっ、デカい癖に動きが速いな。あっ、人が飛んだ」
熊の魔物の攻撃を受けた自警団員が、鎧と盾を破壊されながら宙を舞う。
俺は即座に飛行魔法で団員達を飛び越え、吹き飛ばされた団員を受け止めた。
「う……うう……」
これは酷い。
団員の鎧は、ドワーフ職人達がいい意味で好き勝手に作った高品質な鎧だ。それにもかかわらず、紙くずのようにグチャグチャにひしゃげている。
後方に下がった俺は負傷した彼を地上に降ろすと、魔力強化した肉体の腕力でひしゃげて肉に食

い込んだ鎧を引きはがし、回復魔法で血を止める。
「応急処置はした。後は後方のミューラに治療を頼む」
「分かりました！」
他の団員達が負傷した団員を運んで村へと戻っていく。
「後は俺がやる！　皆は下がって傷の治療に専念しろ！」
剣を抜いて前方に向かいながら叫ぶと、俺の命令を聞いた団員達が入れ違いに下がっていった。
巨大な熊の魔物が唸り声をあげる。
俺が出てきた事で警戒しているのだろう。となれば、知能もそれなりに高いのかもしれない。
「ふっ！」
俺は手にした剣を構えて魔物の足元へと飛び込んだ。
魔力で強化した俺の肉体は、一瞬で魔物の懐へと到着する。
熊の魔物が俺の姿を見失って周囲を見回している。どうやら巨体ゆえに、足元への注意がおろそかになっているようだ。
そして動体視力もそこまで良くはないと。
と、ようやく俺の居場所に気付いた熊の魔物が、足元へ目がけて前足で攻撃してくる。
俺はそれを紙一重で避けると、手にした剣を横薙ぎに一閃する。
すると、ボフッといった感触で剣が受け止められてしまった。

「なるほど。これはやりにくい」
熊がまた前足を振り上げてきたので、一旦下がって今度は炎の魔法で攻撃する。
「ファイアアロー！　フレイムランス！　フレイムピラー！」
威力の段階を踏んで、魔法を発動していく。
何故こんなまどろっこしい戦い方をしているのか。
それは単純な話で、俺がいない時でも魔物を倒せるように、敵の情報を収集する為だ。
俺は勇者として戦ってきた事で、常人をはるかに超える力を持っている。だから俺が本気で戦えば、この熊の魔物程度、指先一つでダウンである。
だが、それではいけない。俺がいない時でも、住人だけで倒せなければ意味がないからだ。
先ほどの剣での攻撃もそうだ。
さっき俺が使ったのは、いつも使っている偉大なる剣帝（ノーブルカイザード）ではなく、村の自警団に配備されているドワーフ製の普通の剣である。
凄腕職人であるドワーフ達が作ったので、名剣（めいけん）と呼ぶにふさわしい逸品（いっぴん）だが、それでも魔剣（まけん）や聖剣（せいけん）といった代物と比べれば何ランクも落ちるのは否（いな）めない。
最後のフレイムピラーを喰らった熊の魔物が、悲鳴をあげる。
先の二つの魔法を喰らった時にはあげなかった悲鳴だ。
「ふむ、上級クラスの攻撃魔法なら通用するみたいだな」

とはいえ、上級クラスの攻撃魔法を使える魔法使いなんて、村にはそうそういない。
あくまでも自警団で倒せる戦い方を構築しないとな。
まぁ、村にいる教授達魔法使い組なら上級クラスの攻撃魔法が使えるが、彼等は自分達の研究が第一だから、研究に夢中になって手伝ってくれないだろうしなぁ。
気を取り直して、作戦を練り直そう。
自警団員の攻撃方法となると、剣や槍での攻撃、もしくは最大でも中級攻撃魔法だ。
さっき足を攻撃してみたものの毛に阻（はば）まれて攻撃が届かなかったので、物理攻撃は難しいかもしれない。またジーサさんの話では、魔法攻撃は多少通じたものの、あまり効果はないとの事だった。
動きを止めてから炎系の魔法の波状攻撃で時間をかけて仕留める、と言ったところが理想なんだが……
となると、シンプルな戦術で挑むべきかな。
「アースクラフト!!」
俺は土属性の非攻撃魔法で地面を揺らす。
俺を攻撃する為に向かってきた熊の魔物だったが、突然足元が波打って揺れ出したので、足を踏ん張って体を固定した。
よしよし、第一段階は成功だ。
そして第二段階。

俺の魔法が地面を更に揺らし、その形を変えていく。
地面は、驚く熊の魔物を覆って壁を作る。
いやそうではない。熊の魔物が地面に沈んでいっているのだ。
俺が使ったアースクラフトは、土の形を変える魔法。本来なら整地に使用する生活魔法である。
凹凸の激しい地域や山岳地帯でも簡単に地面をならす事ができるので便利な魔法だったが、長い戦いの歴史の間に失われてしまった遺失魔法でもある。
サリアから教わったこの魔法で、俺は熊の魔物を地面に沈めた訳だ。
そう、即席の落とし穴として。
熊の魔物はみるみる地面深くに沈んでいき、登ろうにも穴が深く狭くて上手く登れないでいた。
「よし。後は攻撃魔法で熊の魔物を攻撃するだけだ！」
魔法を使える自警団員がすぐさまやって来て、一斉に魔法を放っていく。
一発一発は大した威力にならなくても、回避も反撃もできない状況ではどうしようもない。
熊の魔物はしばらくの間、自警団からの魔法攻撃に耐えていたが、遂に力尽きて地の底に倒れ伏した。
「おぉぉぉぉぉっ!!」
先ほどまで苦戦をしていた熊の魔物を自分達の力で倒したとあって、団員達の喜びは大きかった。
「何とか倒せましたね」

俺のつぶやきに、ジーサさんがうんうんと頷く。
「これもトウヤさんのおかげですな。我々だけではここまでスムーズに討伐方法を考えつきませんでした」
こんな事も思いつかないなんて異世界人脳筋すぎだろうと思うかもしれないが、人間の固定観念とはそういうものなのだ。今までこうだと教えられていたなら、それが一番良い方法だと、疑いも持たずに信じ続けてしまうのである。
こういう凝り固まった考えが浸透している集団の意識を変える場合、上の人間から変わらないといけない。だからこそ、圧倒的な戦闘力を持つ俺が先頭に立ち、団員達でもこの極寒の地の魔物達と渡り合える戦い方を示したのだ。
「サリアから戦いに使えそうな生活魔法を教えてもらいましょう。戦場を自分達に有利な形に作り変えるこの魔法は、他の魔物との戦いでも使えます」
アースクラフトは、敵の足場を悪くするだけでなく、味方の足場を良くする事にも使える。
例えば、地面を盛り上げて即席の高台を作って、上から一方的に攻撃する事もできるのだ。
生活魔法だから制御は攻撃魔法ほど難しくないし、消費魔力も少なく済む。
団員達の補助戦力としては非常に都合が良かった。
「承知しました、トウヤさん。魔物の素材を回収しましたら、傷の軽い者からサリア様に教えを乞うように伝えます」

ジーサさんとの軽い打ち合わせを終えた俺は、屋敷へと踵(きびす)を返した。
ちなみに、この熊の魔物の効率的な倒し方が考案され、毛皮や肉といった素材がイナカイマの特産物となるのは、もう少し後の話である。

◇

「あら、お帰りなさい」
屋敷に戻ってくると、リビングに一人残っていたエアリアが椅子に座ったまま出迎えてくれる。
「エアリアだけか？」
「ええ、サリアは生活魔法の講義に、ミューラは各村の住人の心のケアに行ってるわ」
「心のケア？」
なんかあったのか？
「彼等は元々住んでいた土地から引っ越してきたでしょ？　そういう人達って、精神的に不安定になりやすいみたいなのよ。この村は他の村に比べてかなり発展してるから生活は楽だけど、それでもストレスは溜まるみたいよ」
はー、なるほどねー。長い事異世界で旅をしてたから、そこら辺の感覚マヒしてるわ。確かに旅行から帰ってきた日の晩って解放された気分になるもんなー。慣れない環境にいるっていうのは、

それだけでストレスなんだろう。
「そういう意味でも、ミューラに来てもらったのは正解って訳か」
「そうね」
エアリアが無言で俺にお茶を差し出してくる。
うん、こういうやり取りってなんか熟年夫婦っぽくて良いな。悪くない。
何となくくすぐったい感じだったので、お茶を受け取るついでに礼を言う。
「ありがと」
「どういたしまして」
だが、くすぐったいのはエアリアも同じだったらしく、彼女もまた少し茶化したような口ぶりで返してきた。
「逆召喚魔法については何か分かったか？」
間を持たせる為に、父親の「最近学校はどうだ？」みたいな感じで聞いてしまう。
「あんまり進んでないわね。今はトウヤの世界を探すよりも、繋(つな)がった世界と長時間で回廊を繋げる為の研究をしてるわ。せっかくトウヤの世界に繋がっても、すぐに切れたら意味ないもの。そして一度繋がりが切れた世界にもう一度繋ぎなおせる保証もないしね」
なるほど、エアリア達の研究は新しい段階に入っているって訳だ。
「後はどこに繋がるかの詳細が分からないのも問題だわ。安全な世界でも、火山の中や海の中に繋

がったら危険だし、どこに繋がるかをこちらの意思で決める事ができると、もっと研究が進むんだけどねぇ」

そう言って、グッタリとテーブルの上に頭を寝かせるエアリア。

どうやらそうとう行き詰まっているみたいだ。

「ちょっと、息抜きしないか？」

「息抜き？」

俺の提案に興味を持ったらしく、エアリアが姿勢を戻す。

「ああ、ミナミッカ群島にでも行って、海水浴とかどうだ？　あそこなら国の追手にも見つからないしな」

ついでに避難村の視察もできるし。

「ミナミッカ……」

しかし何故か、エアリアは乗り気でない。

「嫌なのか？」

「……嫌というか……」

なんか煮え切らない感じだ。

「アンタ、あそこの長のサザンカに手を出したでしょう」

いきなりストライクボールを叩き込まれた。

「え、いや、まぁその……」

なんでバレたし？

「やっぱりね」

しまった、カマかけられた。

エアリアが溜め息を吐く。

「その様子だと、村の女の子にも手を出したでしょう。もしかして全員かしら？」

馬鹿な!?　何故そこまで分かる!?

「何故って顔してるわね。分かるに決まってるでしょ。アンタ、あそこの村に行った時、『キツネ耳っ娘キター!!』って叫んだじゃない。なんか獣人の女の子に対して、妙に興奮してたのも覚えてるわよ」

Ｏｈ……

「しかも向こうもソレを察したのか……悪い気分じゃないみたいだったしさ」

「ん？　何か言ったか？」

声が小さくて聞こえなかったが、大抵こういうのは嫉妬してる時だよな。俺はそこまで鈍い男じゃねーぜ！　察しは良いんだ！

「べ、別に何でもないわよ」

うむ、やはりこういう反応になるか。

俺は椅子から立ち上がると、エアリアの隣に座って彼女の腰に手を回して抱き寄せる。
「え？　な、何？」
「いや、何となくエアリアを抱きしめたくなったのさ……嫌か？」
「……嫌じゃないけど」
エアリアは抱きしめてからのキスを喜ぶところがある。
なので今は、ご機嫌斜めになったエアリアを喜ばせる為に、たっぷり抱きしめてやろう。
優しく抱きしめ、腰に手を回したまま髪を撫でてやる。
「んっ……」
エアリアが猫のようにうっとりと目を細めながら、俺のなすがままに髪を撫でられる。
なんとか機嫌を良くしてくれたみたいだ。
後はこのまましばらく撫でたら、流れでミナミッカ群島へ連れていく事にしよう。
「じー……」
「じー……」
と、その時、窓の外からこちらをじっと見つめるミューラとサリアの姿が目に入った。
……どうやら、後でこの二人も抱きしめないといけないみたいだ。

第二話　勇者、南の島でバカンスする

「よく来たなトウヤ！」
ミナミッカ群島の獣娘達の村にやって来ると、長であるサザンカが出迎えてくれた。
「おお、今日はエアリアにミューラもいるのか！　この間会ったのは、確かシルファリアだったな。むっ？　新しいつがいも連れてきたみたいだな！」
マシンガントークなうえに、ストレートな単語で正解するのはやめていただきたい。
「サ、サリアです。よろしくお願いします」
「サザンカだ。トウヤのつがい同士、仲良くしようじゃないか」
「は、はい。よろしくお願いします」
なんだかサリアがサザンカに押されてるな。
こういうグイグイ押してくるタイプは苦手なんだろうか？
「今日は、息抜きに遊びに来たんだ」
「「「おおーーーっ!!」」」
俺の言葉に反応して、そこら中で獣娘達が歓声をあげる。

「じゃー遊びに行こー！」
「一緒に狩りしよー！」
「一緒に寝よー！」
「つがいになろー！」
獣娘達が殺到してくる。
ふふふ、モフモフの娘さん達にモフられるのは最高の気分だぜ。
「……おのれトウヤぁ～！」
なんか殺気を感じると思ったら、見知った顔がこっちを睨んでるじゃないか。
俺を睨んでいたのは、ミナミッカ群島の避難村の開拓に従事していた魔法使い、ジャックだった。
アイツはケモナーだったから、このミナミッカ群島はパラダイスだと言っていた筈なのだが……
何故そんな憎々しげな目で俺を見てくるんだ？
「……せっかくの獣人娘パラダイスだったのに！　何故お前ばかりそんなにモテるんだ！　どの子もお前のつがいになりたいと言って、俺の事は相手にもしてくれん‼」
知らんがな……と切って捨てようにも、思い当たるところがありすぎるのでそっとしておこう。
間違っても、この島の女の子の大半が俺の女になってる、なんて残酷な真実を伝える訳にはいかない。バレたら間違いなく命を狙われる。
「おお、そういえばジャックはトウヤの知り合いだったな。アイツは困ったらいろいろと手伝ってくれるから便利だぞ。まぁ体が弱いのか、すぐ鼻血を出すからつがいには向かんがな」
むごい。むしろ鼻血が出るのは健康な男の子の証なんだが……人間の生理現象に疎いケモ娘達にとって、ジャックはつがいに向かない男認定されてしまっていた。いと憐れなり。
「しかし良いタイミングで来たな」
と、サザンカが話題を変えてくる。
「何かあったのか？」
俺の問いかけに、サザンカがニヤリと笑みを浮かべる。
「お前、言っていただろう？　帝国の使者を紹介してほしいと」
その話か！
「ってことは、来たのか！」
「ああ。数日前に来た。今は他の島の長達に挨拶をしに行っているところだ。まぁ、連中には無駄足になるだろうがな」
と、サザンカが意味深な事を言う。
挨拶が無駄足になる？
「どういう事だ？」
「何だ、気付かないのか？」
サザンカがニヤニヤと笑っているのはどういう事だろう？

帝国は以前サザンカ達獣娘に攻撃してきた訳だしな、そこら辺の確執が影響するって事だろうか？
「また……」
「またですね」
「ここでもなんですね」
「まぁ予想できた」
なにやらエアリア、ミューラ、サリア、シルファリアには理解できたらしい。
「サザンカ、意地悪しないで教えてくれないか？」
「ふふふ、まぁ良いだろう」
サザンカが機嫌良さそうに俺に近づいてくる。
そして、キスをしてしまいそうなほどまで顔を近づけると、サザンカは俺を情熱的に抱きしめた。
「このミナミッカで権力を持つ者は、全員お前のつがいになっているからな。そしてミナミッカの方針を決める際の最高決定権を持つ俺のつがいにして、この村の主であるお前の許可なく、勝手に帝国と交易を結ぶ者はいないという事だ」
「な、何いぃいぃぃ!?」
俺がサザンカとつがいになっていたと知って、ジャックが半狂乱になって口から泡を飛ばしながら叫んでいる。このまま倒れそうな勢いだ。

「サ、サザンカちゃんがトウヤのモノだ……と……？　そ、それに他の長の子達まで……？」
ヤバイヤバイ、顔が真っ赤になってるし。血管が切れて本気で憤死とかしねぇかなアイツ。
っていうか、隠そうと思った事が速攻バレちまったわ。
「だから、帝国の連中がここに戻ってくるまで気楽に待っていると良い。皆、お前と遊ぶ事を心待ちにしていたからな！」
「「トウヤ遊ぼー!!」」
再び獣娘達が群がってくる。
まぁ元々そのつもりで来た訳だし、それはそれで構わないか。
「分かった、それじゃあ皆で遊ぼうか！」
「「おおー!!」」
「エアリア達も行こう」
「しょうがないわねぇ」
「しょうがないですよねぇ」
「本当にしょうがないです」
「しょうがない奴だ」
溜め息を吐きながら、エアリア達が同意の声をあげる。
っていうか、エアリア達の反応が微妙なんだが。

「良いわよ。ここに行くと聞いた時から、こうなるのは大体分かってたから」
何か先読みされてた。
「ふはは！　お前もようやくトウヤのつがいになれたみたいだな！　良かったじゃないか！　正直いつつがいになるのかとハラハラしていたぞ」
「うっさい！　大きなお世話よ！」
エアリアとサザンカが、アニメの猫と鼠のように仲良く喧嘩している。
「さーて、次は誰がトウヤの子を産むかの競争だな！」
「絶対負けないんだから！」
「ははは、いい気迫だ！」
何やら俺を無視して勝負の内容が決まってしまった模様である。
というか、その話題は俺が困る。何というか、うむ……

◇

「トウヤー！　はーやくー！」
獣耳娘達の俺を呼ぶ声が聞こえる。
だが、今の俺はソレどころではなかった。

「おおう、なんて刺激的なんだ！」
後ろから、興奮した様子のジャックが悶えている声が聞こえた。
いや、一応ジャックも誘っておかないと……だって未来永劫呪われそうな感じだったんで。
だが、ジャックがそうなるのも無理はない。
何故なら……
「どうしたトウヤ、皆海に入っていったぞ」
水着に着替えたサザンカが俺のもとへとやって来る。
否、それは海服という名前の下着だった。
獣娘達は海に囲まれた島に住んでいる種族。故に、彼女達にとって海は身近な存在。そして、泳ぎは必要不可欠な技術だった。
そんな技術の邪魔になるものは何か？
そう、服だ。
元々暖かいというか暑いミナミッカ群島では、服の需要が低い。
彼女達が服を着るのは、森の中などで怪我をしないようにする為、また毒草に触れて肌がかぶれないようにする為という、獣にとっての毛皮の代用品としてだった。
なので、海で泳ぐ際に服があると水を吸って邪魔なだけ。
結果、彼女達は、海服という名の極小面積の下着で海に入っていた。

「ふぉおおおお……」

地球の危ない水着を知っている俺でもかなりの破壊力なのに……女の子が薄着になる習慣のない西側諸国で暮らしていたジャックは、出血多量で昇天寸前だ。

なお、俺も中腰である。

いやでもね、ここにはエアリア達がいるしね。

下手な姿を見せたら、それこそ俺の株価がストップ安ですよ。

「まったく男って見境ないわよね」

「男の子ですから」

「男の人ですもんね」

「男だからな」

バレてーら。

結局、時間をかけて必死で落ち着かせてから、俺は不埒な事を考えないように獣娘達と魚獲りなどの遊びに集中するのだった。

何を落ち着かせたのかは聞いてはいけない。

なおジャック氏は、貧血になってそろそろ死にそうだった。

「やっぱ獣人の子は最高ーっ！　皆薄着でさいっこー!!」

もしかしてコイツの獣人好きって、獣人は基本薄着だからだったりするのだろうか？

だとしたらケモナー失格である。
「尻尾がピコピコして、スカートめくれるのさいっこー!!」
あ、そこは同意です。心の底から。

◇

「魚以外の肉が食べたい！」
突然サザンカがおかしな事を言いだした。
「何だいきなり」
「うむ、前にトウヤが言っていただろう？　人間達の国には牧場というモノがあって、肉が食べ放題だと」
確かに教えたが、食べ放題だとは言っていないぞ。
「このミナミッカ群島にも獣はいるが、食べ放題できるほどの数はいない。だから牧場が欲しいのだ！」
ちらりとサザンカの秘書にして副村長であるウサギ獣娘のタンポポを見ると、申し訳なさそうな様子で首を横に振る。
どうやらサザンカの、突発的な思いつきのようだ。

「確かにサザンカ様のわがままなのですが、ミナミッカ群島全体の食料事情に関係する事ではありますね」
しかしタンポポ、上司を擁護するような物言いをした。
「と言うと？」
「はい、先日トウヤ様がこのミナミッカに来訪された際、海に巣食う巨大なイカの魔物を退治してくださいました」
ああ、そんな事もあったな。
「あの騒動では、肉食の者達の食べる物が極端に減って、非常に困った事態になっておりました。ですので、また海に出られなくなった時の為に、陸に牧場を作りたいというのがサザンカ様のお考えなのです」
うん、よくもまぁ、上司の欲望を部族の問題に絡めて上手く包み込んだもんだ。
とはいえ、サザンカ達の悩みも分かる。
獣人の食料事情は、彼女達の獣部分に大きく左右される。
基本的に雑食な彼女達だが、味の嗜好と必要とする栄養は獣部分に引っ張られるのだ。肉食動物のサザンカなら肉を、草食動物のタンポポなら野菜を、といった具合に。
更に、猫系の獣人は猫と同じでイカが苦手だ。食べたら腰を抜かす。
そういう意味でも、多種多様な食料を用意する必要があった。

「魚以外の肉か。となると、ミナミッカ群島だけじゃ土地が足りないな」
そもそも牧場を作るには　それなりに広い土地が必要だ。
だが、ミナミッカ群島は島の集合体。あまり土地に恵まれているとは言えない。
それに海沿いなので、家畜に飲ませる水の問題もある。
なので俺は一つの案を出す事にした。
「貿易をしないか？」
「貿易？」
「ああ、サザンカ達にはこのミナミッカ群島で獲れた魚を、俺達に売ってほしいんだ。幸い避難用に設置した転移ゲートがあるから、互いに行き来が可能だ。そして俺達は牧場で食用の家畜を育て、そちらに販売する。これならお互いに、自分達にないモノを少ない手間で手に入れる事ができて良いと思うんだ」
「おお！　それは良いな！」
加えて、サザンカ達に牧場経営を教えるのには時間がかかる。
牧場に使える土地がどの程度あるかも分からないし、森を切り開いて土地を確保する事を快く思わない獣人もいるだろうからな。
「ですが、それだと海に出られなくなった時に交換する魚がなくなります。それでは当初の目的が果たせません」

貿易では食料自給率が増やせないと、タンポポは苦言を呈する。
「分かっている。だから、サザンカ達には魚の養殖も頼みたいんだ」
「養殖ですか？」
「ああ、浜辺に魚を飼う生け簀を作って魚を育てるんだ。将来的には、そこで育てた魚を俺達に売ってほしい」
「しかし、我々は魚を獲る事はできますが、育てた事はありませんよ？」
技術がなくては上手くいかないと、タンポポは不安そうだ。
「大丈夫、俺に考えがある」
そう言って俺は、自分の胸をドンと叩いた。

◇

「この辺で良いか」
海岸沿いでそれなりに水深の深い場所を見つけた俺は、毎度おなじみストーンピラーの魔法を唱えて岩の柱を作り出す。
「うわっ!?　こんなのどうするんだ？」
付いてきたサザンカ達が驚きの声をあげる。

「ああ、これを生け簀を囲う壁にするんだよ」
そう言って岩の柱をカットし、出来上がった何枚もの壁を海底に突き刺していく。
そして魔力による肉体強化で壁を力ずくで深く差し込んでいき、隙間ができないようにぴったりとはめ込んだ。
ただし、一か所だけは大きくスペースを空けてだ。
「トウヤ、あそこはなんで空いてるんだ？　魚を飼うならあそこにも壁が要ると思うぞ」
サザンカの疑問は当然だ。だが、俺はそれにこう答える。
「ああ、あそこには網を張って水が出入りできるようにするんだ。水は定期的に入れ替えないと腐っちまうからな」
「なるほど」
「トウヤ様、それだと稚魚が逃げてしまうのでは？」
と、タンポポがおずおずと疑問を投げかけてくる。
なかなか良い質問だ。
「稚魚は少しくらい逃げても良いんだ」
「「ええっ!?」」
サザンカとタンポポが驚きの声をあげる。
魚を飼うと言っているのに、逃げて良いとはどういう事なのかと。

「この生け簀には、魚を飼う為に毎日決まった時間に餌を撒く。そうすると、ここにいれば食べ物に困らないし壁と網があるから外敵に狙われないと魚は理解するんだ。そうすれば逃げた稚魚も餌欲しさに戻ってくる」
上手くすれば、その稚魚が他の魚を連れてきてくれるかもしれないしな。
「なるほど、餌が貰えるなら当然戻ってくるだろうからな！」
「それにこれなら手入れの手間も必要なく、仕事は餌を与えるだけですね」
おっ、さすがタンポポ。この生け簀の本質をよく理解している。
確かに二人が最初気にした通り、この生け簀はとてもザルな構造だ。以前、海辺の国で作った生け簀を再現した方が、確実に多くの魚を養殖する事ができるだろう。
だが、あの生け簀は獣人達に向かない。
メンテナンスの手間がかかるからだ。
獣人は基本的にぐーたらなので、ザルなくらいがちょうど良いのである。
同じ養殖でも、土地柄に合わせて行わないとな。
「よーっし！　それじゃあさっそく、ここで育てる魚を捕まえるぞ！　なるべく同じ種類の魚を集めてくるんだ！」
「「おおー!!」」
サザンカとタンポポが元気良く返事をしてくれる。

「よーっし、たくさん魚を育てるぞー！」
「ええ、島の食料を満たせるように頑張りましょう！」
二人は獣娘達に命じて、船を出発させた。
その後、欲張って広大な海の沖で伸び伸び暮らしていた巨魚（きょぎょ）を捕まえてきたり、戻ってくる途中でうっかりつまみ食いしてしまったりする者が続出したせいで、養殖計画の開始は微妙に遅れるのだった。
……生け簀の魚をつまみ食いしないといいけど。

第三話　勇者、帝国と遭遇する

「トウヤ、来たぞ」
サザンカが俺に囁（ささや）く。
家の中にいるというのに、サザンカの感覚は外から近づく者達の気配と足音を認識したらしい。
獣人は文明レベルは低いが、それを補って余りあるほどの身体能力の高さがある。
そして、ドアのない獣娘の家の前に、数人の人影が現れた。
「どうも、サザンカさん」
聞こえてきたのは、男の声だ。
「うむ、入るが良い」
「では、失礼します」
サザンカの許可を得て、男達が入ってくる。
中心に碧（みどり）の衣装を纏（まと）った男が一人、左右に二人ずつ鎧を纏った男達の、計五人、帝国の者達だ。
「さすがに狭いな、お前達は下がりなさい」
真ん中の男の指示で、両端の二人が後ずさっていく。

立ち読みサンプル
はここまで